

婚約破棄から始まるふたりの恋愛事情

パフェグラスの内側に、輪切りの真つ赤な苺とふわふわの白い生クリームが交互に並んでいる。てっぺんには、まん丸いバナライイスと飾りのミント。その葉をつまんで受け皿にのせた。舌触りのよい生クリームとアイスの甘さ、苺の酸っぱさが、口のなかで絶妙に混ざり合う。

「おいしい」

ひとくち食べた私——加藤星乃は、正面に座る彼に笑いかけた。頷いた彼はコーヒーカップを手にする。

表参道で待ち合わせをするのも、こんなオシャレカフェにふたりでくるのも久しぶりだ。

今日は三月十四日、ホワイトデー。チョコのお返しは前から欲しいと伝えてあったピアスだと嬉しい、なんて思うのは図々しいかな。

私は、パフェスプーンを持つ手を、ふと止めた。

そして左手の薬指に光る指輪をうっとり見つめる。

あと二か月で夢にまで見た結婚式だ。迷いに迷って選んだあのウェディングドレスを早くお披露目したい。幸せそうだと、皆に羨ましがられたい。

いまの私には、指輪もパフェグラスも店内の灯りも、全部キラキラして見える。

(ああ、私……これからもっともっと幸せになるのね。この店内にいる人のなかで、私以上に幸せな人なんていないんじゃない?)

嬉しい気持ちはどうしても顔に出してしまう。

今日はこのあと、いよいよふたりの新居を探しに行くのだ。だから、張り切って新しいワンピースを着てきた。彼も休みの日だというのにスーツ姿で気合十分だ。

「ねえ、どこの不動産屋さんに行く?」

背筋を伸ばした私は、明るい口調で彼に話しかける。

「憧れは吉祥寺<sup>きちじょうじ</sup>辺りだけど、会社から離れちゃうよね。それに――」

「星乃」

「ん?」

「いや、不動産屋は行かない。今日はここでおしまいなんだ」

「そうなの? このあと仕事?」

「……違う」

どうしたのだろう。今日の彼は口数が少なく、ずっと浮かない顔をしている。

仕事で疲れているのだろうか。それなら予定は延期して、彼を少しでも休ませてあげたほうがいいに決まっている。

じゃあ帰ろう、と言おうとした時、テーブルに両手を突いた彼が勢いよく頭を下げた。

「ごめん、星乃。結婚、やめよう」

「……え?」

彼の放った言葉がうまく聞き取れない。というより、理解できなかった。

「星乃との結婚、やめたいんだ俺」

結婚、やめよう? 私との結婚を? やめる? やめたい……!?

混乱した私は、普段たいして使わない頭をフル回転させて、様々な理由を脳内から探した。

「急に……どうしたの? 転勤とか? 私、海外でもどこでもついていくよ? 何か悩みがあるなら相談に乗るし、支えるし――」

「好きな人、が、できた。だから結婚……やめたい」

テーブルに額<sup>ぬか</sup>をくつつけそうな体勢のまま、彼が言う。

(何、なんなの、え、なんて……? なんて言ったの、いま、なんて……!?)

頭のなかを同じ言葉がぐるぐると回り、動悸<sup>どうき</sup>、息切れ、目眩<sup>めまが</sup>がいつべんに起きる。

「好きな、人?」

好きな人ができたということは、私はあなたの好きな人ではなくなったということ、そういうことで、そういう、こと……

「本当にいまさらだけど、でもいま言わないと、星乃のこともっと傷つけるよな。……ごめん」  
息がうまくできない。声も出せない。

「ごめん。本当にごめんなさい。ごめん……！」

頭を下げ続ける彼のつむじを、呆然と見つめた。パフェスプーンを持つ私の手のひらには汗が噴き出している。アイスを食べたばかりだというのに喉がカラカラだ。何か、言わなければ……

「冗談、だよな？ 結婚式の招待状だって何通か返事が戻ってきてるのに、なんて話せば」

「それは、俺が連絡する」

「だって私……会社辞めちゃったよ？ 皆からお祝いされて、披露宴も出るからねって、そう、約束して、もらって……」

寿退社なんて珍しいね〜！ と言われながらもお祝いされ辞めたのが、つい二週間前のこと。

あなたもその場にいたでしょうが。それに、あなたが私に仕事を辞めろと言ったんじゃないんでしたっけ……？

「すまない」

「お父さんも、お母さんも、妹も……皆喜んでる、よ？」

声が震えてしまう。頭が痛い。吐き気もする。

「本当に……申し訳ない」

社内恋愛して、トントン拍子に結婚が決まったあなたと私なのに。私たちの二年半はなんだったの、と罵ろうとした時、別の言葉が口を衝いて出た。

「……誰？」

「え？」

私の問いに彼が顔を上げる。その顔は私の知っている彼とは別人に見えた。

「好きな人って、私の知ってる人？」

声を絞り出すようにして彼に尋ねる。

まさか会社の人だろうか？ 同僚？ 先輩、後輩……そんな身近な人だったら——

「それは——」

「いい！ やっぱいいい。……聞きたくない」

ダメだ。それを聞いてしまったら私、何をするかわからない。

ぐわんぐわんと頭のなかで大きな音が鳴っていて、カフェのざわめきが遠くに聞こえる。

「ね、本当なの？ 何か別のことがあって嘘吐いてるとか、そういうの——」

「嘘じゃない。どうしても、星乃との結婚は無理だ」

すがりついた一縷の望みは、ぴしゃりとはねのけられた。

視界に入り込む婚約指輪の光が、心に痛い。いくら探しても次の言葉が見つからない。

「その指輪、売るなり捨てるなりしていいから」

口を引き結び、肩で小刻みに息をする私に、彼がぼそりと言った。

「返されても、困るし」

「な……っ！」

そのひと言で、一気に頭へ血が上る。グラスを掴んだ私は彼に向かって水をぶちまけた。

「うわっ！」

ばしゃんという音とともに、彼の顔もスーツも水浸しになった。

「最っつ低!!」

私はバッグとコートを持って席を立ち、出口へ急ぐ。広い店内が一瞬静かになったような気がしたけれど、どうでもいい。

大通り沿いの歩道は人で賑わい、皆、私のことなんておかないしだ。私は、大勢の人の流れに逆らって歩き出した。

いつの間にか空はどんよりと曇り、とても寒い。うつすら芽吹き始めた、春の気配を感じさせるけやき並木の通りを早足で抜ける。

しばらく進んで、後ろを振り返った。

もしや、などと淡い期待を持った自分は愚かだ。彼にとつて私は、追いかけて言い訳をする価値もない女だということを思い知るだけだったのに。

他人の迷惑も顧みずに立ち止まり、その場で苦笑する。

「あー……はいはい、そういうこと」

彼は別れの儀式のために、わざわざスーツを着てきたのだ。

店内で一番幸せなはずの私が、実は一番不幸だったというわけね。ああ、惨めだ、滑稽だ。

「ふっ、はは……。バツカみたい……!」

全身の力が抜ける。……パフェ、全部食べ終わってから言つてよ。

私は冬の終わりの大通りを駅に向かって走った。

「これもいらない、これも……いらない! あとは全部シュレッダー!」

二か月後。彼との思い出を、燃えるゴミとプラスチックゴミと紙ゴミに分けていく。そして、クッションの横にあるスマホに向かって指をさした。

「データもあとで全部消す!」

画像も動画もいらない。SNSは、既に彼からブロックされているのでどうでもいいけど、いっそスマホごと捨ててしまいたいくらいだ。

歯を食いしばりながら、思い出という名のゴミくずを袋のなかへぼんぼん突っ込んでいく。調子が出てきたところで、ふと小さな箱が目についた。

「これは……」

婚約指輪の入ったそれを手に取り、じっと見つめる。

カフェで彼に水をぶちまけた一週間後、私たちは示談で婚約破棄を成立させた。ズルズルと引きずるよりはいいのだろうが、それにしても彼の行動は素早かった、と思う。

そのあと彼から個人的に連絡があったのは、私宛てに郵送された手紙のみだ。

内容は、結婚式の招待状を送った人たちへ詫び状を出しておいたこと、式に関する諸々のキャンセル料を支払ったこと、慰謝料を私の口座に振り込んだこと、という事務的なものだった。

詫び状だけでは申し訳ないと、私の両親が親戚に連絡をし、改めてお詫びの品を送っている。私も電話口で謝罪をした。こちらは何も悪くないのになぜ謝らなければならないのだろうと、ぼんや

り考えながら。

そうしてしばらく「彼女とは別れた。やっぱりお前が一番だ。やり直そう」と彼が言ってくれるのを待っていた私は、本当に馬鹿だったと思う。

「だからこれも、いらんっ！」

指輪の入った小箱を頭上に振り上げ、袋にぶち込もうとして……やめた。そっとフタを開ける。「分別しないと」

あんなにもきらびやかだった指輪が、いまはとても哀れに見える。捨てられた私みたいだ。「……指輪に罪はない、か」

頭の片隅にこびりついている彼の言葉を思い出した。

売るなり捨てるなりしていいと言っていたが、捨てるのはやめたい。かといって持っているのもイヤだ。それなら残る方法はひとつ。

「よし、売ってくる！ 売ってやるんだからね！」

フタを閉めた小箱をベッドの上に放り投げた。明日にでも売ってしまおう。

「さてお次は、これらの処分」

床に散らばるふたりで行った旅先のパンフや、映画や美術館のチケットなどを、わしづかみにする。後生大事に取っておいたそれらをシュレッダーに突っ込んだ。

「あはは、よく切れるうー！ ネット通販シュレッダー部門一位なだけあるわー！」

「おねーちゃん、うるっさい！ 何やってんの、さつきから」

部屋のドアがバンと開き、妹の春乃が入ってきた。

「あー、ごめん。うるさかった？」

口を尖らせていた妹は、部屋の状況を見てハツとする。

「あ、こちらこそごめん。整理中だったのね」

「まあ、ね」

「いいことじゃん、そうやって前に進むのは」

「……そう？」

目を伏せて苦笑しながら、私は別の紙類を掴む。

彼と別れて以降、私は映画のDVDを取っ替え引っ替え見ている。恋愛以外のSFやホラーやアクションものを選び、何もかも忘れてストーリーに入り込み、驚き、怯え、スカツとして、楽しんでいる。

スマホで連絡を取り合う友人らは、私に気を遣ってよけいな話題は振ってこない。

映画の他には漫画を読み、ロック系の音楽を聴き、好きな時間に起きて、好きな時間に眠った。

私には未だに彼との婚約破棄が他人ごとには感じられて、いつまで経っても実感が湧かない。ごはんを普通に食べ、家族と一緒にテレビを見て、普段通り笑っている。

涙も全然、出なかった。

翌日、遅い昼ごはんを食べていたら、二時を回っていた。

私は、自宅の最寄り駅から田園都市線でんえんとしせんに乗り、渋谷で乗り換え、新宿で降りる。駅を出ると、ピルの合間から覗く空は真つ青な五月晴れだった。土曜日の午後ということもあり、東口駅前はずっとさんの人であふれている。

人ごみにまぎるのは久しぶりだ。婚約破棄されてから約二か月間もこもっていた私には、初夏の日差しが目しに沁しみみる。

「よし、行こ」

気合を入れて、歩道を歩き出す。

大通りから一步入ったビルの一階に、目的の店はあった。ブランド品の買い取りショップだ。整理券を渡され、簡易ブースの前に座る。ドアは三つあり、番号順になかへ入っていく仕組みらしい。

「二十三番の方、一番のドアへどうぞ」

呼ばれた私はなかへ入る。男性店員が机の向こうに座っていた。店員の後ろには柵があり、様々なものが置かれている。全て買い取った品だろう。

「大変お待たせいたしました。どうぞ、そちらへお掛けください」

「失礼します」

店員と机を挟んで向かい合わせに座った。

「本日はどういったものを、お持ちでいらつしやいますか」

「指輪なんです……」

鞆なまはを探つて、婚約指輪の小箱と鑑定書を机に置く。

「ではお預かりいたします」

白い手袋をはめた店員は、小箱から指輪を取り出した。

「失礼ですが、こちらは婚約指輪になりますでしょうか？」

「え、ええ。そうです」

「かしこまりました」

私は今日、この婚約指輪を売るために、わざわざ新宿までやってきたのだ。

彼に指輪を買ってもらった時は、結婚資金に回してほしいから安いのでいいと言っただけど……それでも二十万円はしたはず。購入して半年も経っていないから、結構いいお値段がつくかもしれない——などと少し期待する。

宝石鑑定用のルーペを脇へ置き、かちやかちやと電卓を叩いた店員は、それを私へ見せた。

「こちら、二万五千円でのお引き取りとなりますね」

「……へ？」

半額にもほど遠い値段が表示されている。驚いて声を上げたその時——

「婚約指輪なのに!?!」「婚約指輪ですよ!?!」

(な、何よ、いまの声?)

私の言葉と「婚約指輪」の部分ぶぶんが被った男性の声が、隣のブースから確かに聞こえた。

それに動揺しながらも、私は目の前のスタッフに向けて言葉を続ける。

「その指輪、購入してまだ半年も経っていないんです。ほとんど身に着けていないし、値段も

二十万はしたはずなんですが……」

もしかすると、隣のブースの男性も私と同じ立場で、思わず叫んでしまったのだろうか。いや、世のなか、婚約破棄された人なんて、そうそういるわけがないか。

「大変申し訳ないのですが、その『婚約指輪』というのがネックでして。多分、他店に行かれても同じ結果になるかと」

「そうなんですか……?」

「売られた婚約指輪というのは、その、……あまりいい意味の代物しろものではないと思われてしまいがちでして」

「結婚がうまくいかなかった人が売りにくる、と」

「そうではない方もいらつしやるのですが、世間一般の受け止め方としては、はい」

不幸の象徴というわけだ。私は小さくため息を吐いた。

「そんなの誰も欲しくありません」

「ご理解いただけると助かります」

「わかりました。その金額でお願いします」

「かしこまりました。ありがとうございます」

私が買ったものではないのだし、もともとそれだけの価値だと考えれば諦めもつく。

お金を受け取った私は、ドアを開けてさっさとブースを出た。同時に隣のドアが開き、男性が出てくる。

(さっき私と同時に叫んだ人、だよな?)

私の視線に気づいた彼が、ゆっくりとこちらを向いた。

振り向いたその人は、なかなかの爽さわやかイケメンくんだ。スクエアフレームのメガネをしている。すらっとした背丈は一七五センチ以上はありそうだ。私が一五五センチだから二十センチの差はある。色味の綺麗なブルーのシャツにジャケット、ラフなパンツを穿はいていた。清潔感があり、オシャレな雰囲気まじを纏まとっている。年は私と同じ二十代後半とみた。

こんな人がフラれて婚約破棄されるわけないか……?とっていると、私と目が合った彼はばつが悪そうに苦笑した。

「……どうも」

「ど、どうも」

私も同じ返答をする。

「聞こえましたよね? さっきの」

「えっと、ええ。……聞こえました」

「参ったな」

やはり私と同じ立場なのだろうか。いや、婚約を破棄したといっても、私の元カレのようにそれを言い渡した側の人かもしれない。そこまで考えてはたと気づく。

「ということは、私の声も聞こえたんですよな?」

「まあ、はい、バッチリ聞こえました。……お疲れ様、です」



「お……お疲れ様、です」

その言葉に、彼もフラれた側なのだ直感した。そうでなければ「お疲れ様」などという言葉は出てこない。

（だとすればこの人、可哀想。私は自分で買っていないからまだいいものの……高いお金を出した婚約指輪があれだけの価値だなんて、やってられないよね）

会釈を交わした私たちは、どちらからともなく離れて店をあとにした。

それにしても婚約破棄をされた者同士が出会うとは、奇跡に近いのではないだろうか。悲惨な目に遭ったのは自分だけじゃない。そう思うと、少しだけ心が軽くなる。

「なんに使おうかな、このお金」

売ったお金は、その日のうちに使ってしまうことに決めていた。

ただし、手もとに残るものを買いたくはない。おいしいものを食べたり飲んだりしよう。二万五千円あれば、それなりの食事ができる。

スマホに表示された時間は五時を過ぎようとしていた。まだ夕飯には早いし、辺りをブラブラしようか。

近くにあった百貨店のなかを歩き回る。雑貨や洋服をチラ見してから、上階の書店へ向かった。新刊や雑誌をひと通り眺め、ふと足を止めたコーナー。そこには、頑張りすぎないで楽しく生きる本、恋が終わった時に読む本、自分に向き合う本……タイトルを見るだけで胸に突き刺さるもの

ばかりが並んでいる。どうせこんな本読んだって、何も変わるはずがない。

私はひとつ、ため息を吐いた。

（あまり投げやりになるのはよそう。ネガティブすぎると、運がどんどん逃げていく気がする）

頭を横にふんと振り、棚にさしてある本へ手を伸ばした。と、同時に誰かの手が、同じ本に伸びてくる。

「あ、すみません」

「いえ、こちらこそ」

手を引っ込め合って、お互いの顔を見る。

「あっ！」

「あ！……先ほどは、どうも」

なんと、さっきの婚約破棄メガネくんだった。彼もすぐさま私に気づいたようで挨拶をしてくる。

「どうも……」

とてつもない気まずさのなか、彼が本を手に取り、私へ差し出した。

「どうぞ、この本」

「え、いいんですか？」

「なんとなく手に取ろうとしただけなので。じゃあ、失礼します」

「あ、はい、じゃあ」

軽い会釈をして彼はその場を去った。

なんとという偶然。驚いてまだ心臓がどきどきしている。

私は渡された本の表紙をじっと見つめた。

（こういうポジティブなタイトルの本を手にしようとすると、傷ついた人間の向かう先は同じなのかな。やっぱり彼も婚約破棄された側なんだ。……なんだか切ない）

そんなやりきれない気持ちで譲られた本を購入する。百貨店を出ると、既に六時半になっていた。フレンチや回らないお寿司屋さんにも入ろうかと考えていたけれど、そんな気分じゃなくなっている。私は口コミがよさげな居酒屋に行つて、ぱーっと飲むことにした。

早速、女性ひとりでも行きやすそうな店をスマホで探し、そこへ向かう。

そして、目当ての小綺麗な居酒屋へ入った。おいしそうな匂いが私を取り囲む。清潔感があつて雰囲気がいいし、適度に騒がしいから、しみみりしないで済みそうだ。

「いらつしやいませーっ！ おひとり様ですか？」

「はい、ひとり……あっ！」

店員に答える途中、すぐそばのカウンター席にいた男性と目が合い、私は声を上げてしまった。

「あ！」

メガネの向こうの瞳も私を凝視している。ついさつき書店で会った、婚約破棄メガネくん。またお前かと、彼も同じことを思ったはず。本当になんなの、この偶然は。

「ここ、座ります？」

彼は自分の隣の空席を指さした。それを見た店員が「そうされますか？」と私に問いかける。

「……じゃあ、お邪魔します」

断る理由もない私は、彼の隣に着席し、店員に渡された熱いおしぼりで手を拭いた。

「いらつしやいませ、お飲み物をお伺いしてもよろしいでしょうか」

「とりあえず生。中ジョッキで」

「かしこまりました。生中ひとついただきましたー！」

「ありがとうございます！」と、元気のいい声がかウンターのなかから飛んでくる。

この状況を誤解されないように言っておかなくてはと、彼のほうへ向き直った。

「あの、偶然ですからね？ あとをつけてきたとか、そういうんじゃないですから」

「わかつてますよ。俺——僕も、そこまでうぬぼれたりする人間じゃありません。逆にさっきの書店では、こちらがあなたのをとっていったように感じられたのでは？」

「いえ、そんなふうには思っていない。そちらも偶然ですよね？」

「ええ、もちろん偶然です」

私の前に生ビールとお通しが運ばれると、彼が自分のジョッキを持ち上げた。

「とりあえず乾杯しましょうか」

「そうですね」

かちんとジョッキを合わせる。歩き回って喉が渇いていたせいか、ビールがおいしい。

隣に座るメガネくんは、カウンター越しに焼き鳥を受け取った。炭火で焼いた香ばしいタレの香りに、私のお腹がぐうと鳴る。

「食べます？」

お腹の音が聞こえたのだろうか、彼は焼き鳥が二本載ったお皿を私に差し出した。

「どうぞ。旨いですよ、ここの焼き鳥」

「……いただきます」

甘辛のタレが絡んだ鶏肉が口のなかでじゅわつと弾け、肉汁があふれ出す。

「ん!? ほんとだ、うまつ!」

「でしょ？」

ビールを飲んだ彼が、こちらを向いて笑った。至近距離で見ると笑顔に心臓がドキリとする。

……困った。私好みの顔をしているせいで、その気もないのにときめいてしまいそうだ。

戸惑った私は、話題を振る。

「——婚約指輪」「——婚約指輪は」

「またもや同じことを同時に口走っていた。」

「あつ、どうぞお先に」

「いえどうぞ、あなたからお先に」

彼が先にジョッキへ口をつけたので、私から質問することになる。

「婚約指輪は……あなたが購入されたものなんですか？」

いきなり失礼だとは思いますが、初めて会った時から気になってしょうがなかったのだ。

ごくんと喉を鳴らしてビールを飲んだ彼は、あっさりと答えてくれる。

「ええ、そうです。僕の『元』婚約者に買って、そのあと婚約破棄されて、彼女から突っ返されたものです。あなたのは？」

「私の婚約指輪は、『元』婚約者にもらいました。返されても困ると言われて、さっきのところへ売りに行ったんです」

「なるほど、そうでしたか」

メガネの真んなかを押さえた彼が、小さくため息を吐いた。

「それにしても……あんな値段しかなかったなんてねえ」

「ふっ、ですよねえ」

「結構な値段で買ったはずなんですが、厳しい現実にはこみました」

「私です。とはいえ、私はもらった身なのでまだマシかもしれませんが……」

お互いに苦笑して、またビールを飲んだ。

この人、話しやすい。お酒のせいもあるのだろうが、初対面の人に戸惑いもせずさらさら言葉が出てくる自分に驚く。どうせもう二度と会うことはないだろうという安心感からかもしれない。

「彼女とは、どれくらい付き合ってたんですかー」

酔いが回ってきた私たちは、くだけた調子で質問し合っていた。

「俺たちが付き合ったのは一年ですよ、一年。結婚したい結婚したいって会うたびに言うもんだから、プロポーズした途端にこれですわ」

「あははっ！ 一年ですかっ!」

いつの間にか「僕」じゃなくて「俺」になってるし。私も馬鹿笑いしてるし。

「笑うとこじやないですよ、それ。あなたはどれくらい付き合ってたっていうんですか」

「私は……二年半くらい？」

もっと長く一緒にいたような気がしてたのに、そんなものだった。

「俺より長いっすね！ ぶはっ！」

「そこも笑うとこじやないですー。別れた原因って聞いてもいいですか？」

「別れた原因は……」

笑顔の彼は一瞬言葉を止めてから、目を伏せた。

「浮気されました」

「え……」

「彼女の職場の、同僚だか先輩だかに寝取られたってオチです」

ははっ、と乾いた笑いをした彼は、当然のように私へ尋ねる。

「あなたは？」

「好きな人ができたって言われて。結婚式まで二か月だったのに……婚約破棄されました」

酔った勢いで上がっていた気持ちが、一瞬で落ちた。

口に出すと改めて身に沁みる。チクチク、ズキズキと胸が痛んだ。まだこんなにひきずっている

自分が悲しい。

彼はそんな私の気持ちを察したらしく、今日一番明るい笑顔を見せて大きな口を開けた。

「飲みましょう！ どんどん飲みましょう！ それで綺麗さっぱり忘れましょう！」

「そうですね！ あなたも飲んで飲んで！ 一緒に忘れましょう！」

グラスをがちゃんと合わせて、ふたりでまたぐびぐびとビールを飲む。

「俺は北村きたむらといいます。あなたは？」

「私は加藤です」

「よし、加藤さん、おかわりは？」

「いきまーす！ あ、私シチリア檸檬れもんサワーがいい」

「俺も！ すみませーん！ こっちシチリア檸檬れもんサワーふたつー！」

そうだ、ぐだぐだ言っつてないで、きっぱり忘れればいい。そのために指輪を売ったんだから。あんな男、いつかどこかで会ったら「どなたでしたっけ？」と言っつてやればいいんだ。

「北村さんは何歳ですか？」

「俺は二十九です。あなたは？」

「私も今年の九月で二十九歳です！ いまは二十八歳！」

「おー、タメじゃないっすか！」

「タメっすね！」

また、がちーんとグラスを合わせた。

ああ、頭がふわふわする。久しぶりに気持ちのいいお酒の飲み方だ……

「あー俺、ワイン飲んでえ」

「頼んじやいましょうよ。あ、これうまつ！ 北村さんも食べて食べて」

私はカマンベールチーズフライが並んだお皿を、彼の前にずいっと差し出した。

「もつと頼んで、じゃんじゃん食うか！」

「あ、そうだ、私が奢りますよ。今日臨時収入あったんです！」

「はははっ、それ婚約指輪のカネじゃん！ 俺が奢りますって。婚約指輪のカネでな！」

「私が奢るのー」

「いや、俺が奢るんだー」

この辺りからもう何を話したのか、よくわからない。

ただただ、ふたりで愚痴を言い合って、ボケてツッコんで馬鹿笑いました。

気がつけば居酒屋を出て、北村さんと夜の繁華街を歩いている。いつの間にか手なんか繋いでいた。

酔っ払いのサラリーマンたちや客引きのお兄さん、大騒ぎで歩く大学生の集団とすれ違う。風は涼しく、ビルの合間の夜空に星がふたつだけ見えた。

私は適当な歌を口ずさみながら、おぼつかない足取りで進む。転びそうになるたびに彼が支えてくれた。こんなに楽しいのって、いつくらいぶりだろう。彼の腕にしがみつき、ワンピースの裾から覗く足がふらつくのが妙におかしくてクスクス笑っていると、目の前に美しい建物が現れた。

「綺麗なイルミネーションですね。こんなところに豪華マンションが？」

私が建物を指さすと、北村さんが歩みを止めた。私も一緒に立ち止まる。

「これはラブホテルですね」

「ふうん。全然そういうふうに見えないですね」

「入りましょうか」

「……え？」

一瞬だけ酔いが醒めたように感じた。

（この人とラブホテルに……？ ということは、北村さんは私とどうにかなりたいと思っている、そういうこと？）

黙っていると、繋いでいた手を強く握られた。どきん、と胸が音を立てる。

「俺は、部屋に行きたいです、あなたと」

「……フラれんぼな私なんか相手でも、いいんでしょるか」

あの日から私は、何をするにも自信が持てずにいた。

婚約相手を失っただけではなく、自分のなかにあった大事なものを全て否定されて、それらがどこかへ消え去ってしまったみたいに感じている。

「俺もフラれんぼですから。慰めてください」

「じゃあ私のことも慰めてください。全力で」

「わかりました。全力でお慰めします」

「……お願います」

「あ、でも、それならここじゃなくて、ちゃんとしたホテルに行きましょるか。といつても俺、こ

の辺はよくわからないんですが」

「いえ、ここでいいです。移動したら、気が変わりそうだから」

キラキラと光る入り口の灯りを見つめながら、決意を込めて北村さんの手をぎゅっと握り返す。

「無理はよくないですよ」

「無理なんてしてません。慰めてくれるんですよ？ ……全力で」

彼の顔を覗き込むと、メガネの向こう、瞳の揺らぎが消えたように見えた。彼の迷いがなくなったのだと、伝わる。

「はい、全力で」

真剣な表情に変わった北村さんは、繋いでいた手をほどいて私の肩を抱いた。最初は優しく、でも一歩進むたびに力強くなる。

（この人の手、すごくあったかい……。なんだか安心する。そういえば今日は何日だっけ？ 何か、とても大切なことがあった日だった気が……）

彼に連れられて、自動ドアから建物のなかへ入る。

「あ、そっか」

「ん？」

「いえ、なんでもないです」

思い出した私は、ひとり苦笑した。

——結婚式の予定日だったんだ、今日。

シャワーを浴びているうちに、私は酔いが醒めてきていた。

「何をためらうことがあるのよ」

鏡に映った情けない顔をしている自分へ言葉をかける。

（彼を慰めるんでしょ？ そして私も彼に慰めてもらうんでしょ？）

出会ってすぐにこういうことをするのは初めての経験だ。だからといって怖気づくのは、いまさらではないか。

バスロープを羽織ってバスルームを出た。おずおずと彼のいるベッドルームへ入っていく。

いい香りが漂い、間接照明が暗めに調節されている部屋は、広く清潔感にあふれている。ラブホテルということ忘れてしまいそうな素敵な雰囲気だ。

「……お待たせしました」

「あ、いえ」

先にシャワーを浴びていた北村さんは、ダブルベッドの端に座っていた。私の顔を見た彼は、手にしていたスマホをサイドテーブルに置く。

「どうぞ」

「失礼、します」

促されて彼の横に座る。綺麗に整えられたベッドが、ぎしっと沈んだ。

その音が妙に現実的でよけいに意識がはつきりとする。こういう時はどうしたらいいのか、勝手に

がわからない。さっきまでの勢いなんてこれっぽっちもなくなって、代わりに動悸がすごいことになっている。この音がお酒のせいじゃないのはわかっていた。

「……俺」

私とおそろいのバスローブを着ている彼は前屈みになり、膝の上で手を組んだ。

「はい」

「もうだいぶ酔いは醒めてるんですが」

「私も、です」

緊張で私の手が震えてくる。

「こんな気持ちになるとは思ってもみませんでした」

意味がわからなくて顔を上げると、こちらを見た彼と目が合った。

「実は俺、勢いで女性とこういうことするのは初めてなんです」

「……え？」

「いや、付き合った女性とはもちろんホテルに入るし、アレコレもしますけど。そうじゃなくて、こういう状況が初めてなんです。出会ってすぐに、女性とホテルに入るという状況が」

「それなら、私も同じです。知り合っただけの人とこういう場所にくるのは、初めてですから」

この人も私と同じだったのかと思うと、少しだけ緊張がほぐれた。

私の言葉に小さく頷いた北村さんは、静かな声で話を続ける。

「そうでしたか。……そりゃ、そうですね。婚約破棄というのはきつといままで生きてきたなか

でも、かなり最悪に近い、傷ついた出来事だと思いますし、自暴自棄になるのも無理はない。……話を戻しますが」

「はい」

「だからというか、酔いが醒めればそういう気持ちもなくなっても仕方がないかと、シャワーを浴びながらなんとなく思っていました。俺だけじゃなくて、加藤さんも酔いが醒めたら俺に抱かれたい気持ちが消えてしまうかもしれないって」

「北村さん……」

「でも俺は違いました。あなたがこの部屋に入ってきたのを見て……醒めるどころか、かえってあなたを抱きたくなりました」

「っ！」

ストリートな言葉を受けて胸が熱くなる。

「あなたを抱いて約束を果たしたい。いま、心からそう思っています」

「……約束？」

「全力であなたを慰めることです」

「あっ」

肩を抱かれ、彼の体に引き寄せられた。ほどけていた緊張が再び甦る。

「あなたは？ 俺と、こうすることに迷いますか？」

「私は……」

北村さんが今夜、私を悲しみのけ口にしようが、いい加減に扱おうが、別にかまわないと考えていた。私だってそのつもりだったから。でもいくら酔っているからといって、それは失礼なことだと、いまの彼の言葉を聞いてわかった。

彼は私とふたりで過ごす夜をながしるにはしない。そう言ってくれているのだ。だから私もその気持ちに応えたいと思う。

「私も約束しましたから。あなたを慰めるって」

「全力出してくれませう？」

「わ、私なりに、ですけどね。上手い下手は置いていただいて」

「あ、俺もそこは置いてください」

彼が笑うので、私まで笑ってしまった。一緒に笑って、くっついている互いの体が揺れる。

「私、イヤじゃないです。あなたに抱かれるの」

北村さんの胸に寄り添い、咬く。私と同じ気持ちを抱えるこの人となら、肌を合わせても大丈夫だ、きつと。

「ありがとう。……加藤さん、緊張してる？」

私の頬に、彼の手がそつと触れた。

「少しだけ」

「大丈夫。あなたがイヤがることは、絶対にしないから」

彼がメガネを外した。たいして度はきつくないのか、瞳の大きさは変わらないが、ますます私好

みの雰囲気纏うからどきりとする。

「ただ、俺も飲んだ上に緊張してるので、その、ダメだったらすみません」

「北村さんも緊張してるの？」

「してるよ、ほら」

私の右手を取った彼はバスロープの前をひらき、胸に押しつけた。手のひらに彼の鼓動が伝わる。それはどくん、どくと大きく脈打っていた。

「……ほんとだ」

「あなたは？」

「私も、同じだと思う」

「じゃあ、直に聞かせて」

「んっ」

そつと唇を重ねられながら、ベッドへ押し倒された。

何度か軽く唇を合わせたあと、柔らかな舌が入り込んでくる。優しく丁寧に、彼の舌が私の舌を舐めた。

今日会ったばかりの人なのに、以前にもキスしたことがあるような不思議な感覚だ。あつという間に頭がぼうつとして体から力が抜けていく。彼はキスがとてつもなく上手なのだろうか……もっと深くキスをしてほしくなったところで気づく。

(あまりにも気持ちがよくて忘れるところだった。私も北村さんを慰めてあげないと)



私は彼の両頬を両手で押さえ、自分へ近づけた。自分から舌を絡ませて彼のキスに応える。すればするほど体の奥が疼いて、すぐに繋がりたい欲求が湧き上がってくる自分に戸惑う。キスだけでそう思ったことはないのだけれど……私の体、今夜はどうしたのだろうか。

北村さんの息遣いが荒くなる。彼は自分のバスローブを脱いだあと、私のバスローブに手をかけてつるりと脱がせた。

お互い何も身につけていない姿になり、肌を直接合わせる。

「ほんた。……ドキドキしてるね」

北村さんが私の胸に耳をあてた。彼の低い声が私の体に浸透していく。彼の頬と私の肌が触れ合って……あたたかい。

そういえば、婚約破棄された元カレと体を重ねたのは、いつが最後だったろう。別れる前からセックスの回数が少なくなっていたのは気づいていた。けれど、それは元カレの仕事が忙しいせいだと気にも留めなかったのだ。

私はとにかく「結婚」できることが嬉しくて、新しい生活を夢見てばかりで……元カレの本当の気持ちが見えていなかったのかもしれない。

起き上がった北村さんが私の耳に唇を押しあてた。

「んっ」

「耳、弱いのか？」

肩を縮める私に、彼が問いかける。

「うん、あっ」

頷くと、耳たぶをちゅつと吸い上げられた。ぞわりと肌が粟立ち、一気に首筋から背中、そして腰まで感じてしまう。お酒のせいで何もかも敏感になっているのかと思ったけれど、どうも違うような気がする。

「……んっ、んあ」

あまり声は出さないほうだったのに、どうしても我慢ができない。熱い肌がびったりと触れるたびに、体がびくびくと震える。彼の手も胸も足も、触れてくる全部が気持ちいいなんて、こんなこと、初めてだ……

ふいに耳のなかにぬるりとした感触を覚えた。舐められるとさらに体中に疼きが駆け巡り、火照っていくのがわかる。

「なんか、俺……」

小刻みに息を吐く私へ、北村さんがぼそりと呟いた。彼は苦しそうに顔を歪めている。

「どうし、たの？」

「くっついてるだけなのに、ちよつと、ヤバいかも」

「え……？」

「加藤さんの全部が気持ちいいんだ。触れてる全部、が」

北村さんが私の耳もとでこぼした。私と全く同じ感想を囁かれたことに驚く。

「こんなこと、初めてだ、俺……」

「私も、さつきからなんだか変……なん、です……んあつ、ああつ」

私の胸を彼の手のひらが丸く包み込んだだけで、声が飛び出てしまう。

「あ、すごく、感じやすいって、どうか、あつ」

「俺も……なんだ、これ……？」

太ももに彼の硬いモノがあたった。

私のほうも多分、十分準備が整ったんじゃないかというくらいに濡れているはずだ。まだそんなに時間をかけていないのに。もしかして体の相性がいいというのは、こういうことなの……？

「あつ！ ん……ああつ」

胸の先端に彼の唇が移動した。電流が通ったように体がびくびくと跳ね、胸だけで達してしまいそうになる。経験したことのない快感に怖ささえ感じた。

ぼんやりと灯る間接照明が揺らいで見える。ボディジェルの香りと、じわりと噴き出す互いの汗の匂いが混ざりあつて、欲情を煽られた。

硬くなっていく先端を舐められ指で弄られることに、痺れるみたいな熱が体を支配していく。

我慢ができなくなった私は、彼の頭を抱えるようにして自分の胸に抱きしめる。そして体をよじり、もつと欲しいと自分から……せがんでいた。

北村さんは両方の手のひらを私の手のひらに重ねて、強く握る。次いで、私の唇から頬、首筋、肩までまんべんなくキスを落としたりした。

「どこもかしこも全部、綺麗だね」

「ほん、と？」

「嘘は言わないよ、綺麗だ」

「……ありがと、う……んっ」

なんとなく、彼が私の気持ちに寄り添うために言ってくれたのではないかと感じた。私が自分の全てに自信をなくしていることに、気づいていてのではないかと、と。

「北村さんは、優しくくて、いいね」

「優しい？」

「私に触れる手が、とても優しくくて……泣きそうになる」

北村さんの首に手を回して抱きしめると、彼は「泣いてもいいよ」と囁いて、私をしつかりと抱きしめ返した。胸がきゅんと痛くなる。

（そんなふうにならわれたら本当に泣きたくなっちゃう。私を慰めるために応えてくれたのはわかっているけど……）

私の足の間に彼の膝が割り込み、ひらかせ、ぐいぐいと太ももを押しつけられた。それだけで体の奥が熱く疼く。汗ばんだお互いの肌が、隙間なくぴったりと吸いついた。

彼はしばらくそうしてから、膝の代わりに自分の手をそこへ滑り込ませた。長い指が私のナカにすわりと挿入してくる。

「あ、っあ」

「……ねえ」

耳もとで熱い吐息とともに尋ねられ、興奮がさらに高まる。恥ずかしいくらいの水音が響いた。  
「本当に、こんなに感じてくれてるんだ……？」

「そうだって、言っ、あっああ」

北村さんの指が少し動くだけで、蜜がぐちゅぐちゅとあふれ出していくのがわかる。

いまにも達しそうなのを必死で我慢した。腰を上げて彼の指に夢中になりながら、どうにか自分の使命を思い出す。私も彼の下腹へ手を伸ばした。

「あ……っ!？」

硬くて熱いモノに触れると、彼が小さく喘いだ。

ゆっくり上下に動かすのに合わせ、私のナカにいる彼の指も動く。弄って、弄られているうちに全てがもどかしくなり、それをどう伝えていいかわからない私へ、彼が先に言った。

「俺、もう挿入りたい。加藤さんに」

たまらないといったその表情に、私の体の奥も切なくなる。

全力で慰め合うと約束した私たちなのに、お互いしたいした奉仕もせず、繋がりがなくなっていた。

「私、も……お願い」

「いいの？」

「ん、早く……」

「わかった」

頷いた北村さんは、体を起こしてベッドサイドの避妊具へ手を伸ばした。

準備の終わった彼と再び唇を合わせ、舌を絡ませて丁寧に舐め合う。体中で荒い息をして、欲しがる思いを熱に変えていく。

私の足をひらかせた北村さんは、遠慮がちに入り口を自身の硬いモノで探った。甘い予感が塗りつけられる。

そろそろと私のナカへ挿入ってきた彼のモノは、途中から一気に奥へ突き進んだ。

「あっ、んんーっ!」

瞬間、目の前がぱっと明るくなり、部屋の灯りが強くなったように感じた。けれど、私の浮いた腰と、ぴんと伸びる足先、強い快感に戦慄く下腹が、灯りのせいじゃないと教えてくれる。

(挿れられただけに……私、達してしまった。……何、これ……?)

「っあ、はあ……っ」

「ちよ、ちよっと待って、あ」

蕩けそうな快感に襲われながら息を吐くと、戸惑う北村さんの声が遠くに聞こえた。

朦朧とする視界をどうにか定めて北村さんを見る。彼は顔を歪めて何かに耐え、そしてかくんと

頭を下げた。

「……ごめん」

「どうし、たの……?」

「さっきから、ほんと変で、もう、もちそうに……ない」

動きを止めている北村さんが、苦しそうに吐息をこぼした。

私を氣遣い、私と同じように感じていることが愛おしく思えて、胸がぎゅっと痛くなる。

「謝らない、で。私は……先にイッチャったから、大丈夫」

すぐそばにある彼の耳もとに言葉を吐き出す。

「だから好きに、動いて。好きな時に、イッて」

私の言葉を聞いた北村さんの顔が、不機嫌なものに変わった。

「そんなに……優しくしないでよ。じゃないと、俺……加藤さんのこと——」

「え……？」

聞き返そうとしたのに、繋がったままむくりと上半身を起こした彼に、腰を打ちつけられた。

「ああっ！ や、んっあ、はあっ」

勝手に声が上がってしまう。肌がぶつかると音が部屋中に響き渡った。

「あっ、あ、ああ……！」

(どうして、優しくしてはダメなのだろう。慰めるって、優しくすることじゃない、の……？)

言いかけた言葉を打ち消すかのように、彼は私を揺さぶり続けた。

突き動かす激しさとは反対に、私の体にキスをする唇は、やっぱり優しい。この人はそういう人なのだ。自分本位ではなく、律儀に約束を守ってくれる人。そう思ったら、またも快感がせり上がってくる。

「もう、イク、よ……くっ」

「んっ、きてっ、ああっ、私もっ」

私を見下ろす彼にしがみつき、嬌声を上げながら頷いた。同時に唇を強く塞がれる。

「んふうっ、んんーっ」

咬みつくような荒々しいキスと、私の下腹で暴れる彼の熱い塊に翻弄され、一気に昇りつめていく。繋がるそこが痙攣し、全身へ甘い快感が駆け抜ける。彼の低いうめき声とともに、私のナカに被膜越しの熱が放出された。

心の痛みをともなう泣きたいくらい悦楽を……彼も共有してくれただろうか……

恍惚に浸る間もなく、気づけば再び彼に激しくキスをされていた。いま終わったばかりなのに、もう始まっている。

慰め合うって、なかなか終わりが見えなくて、そして、満足するまでに時間がかかるものなのかもしれない。

体中の気だるさを欲情の色に変えて、私は飽きることなく彼ともつれあい続けた。

テレビの音で目が覚めた。

一瞬、ここはどこだろうと目を疑ったが、すぐに思い出す。

(私、昨日出会ったばかりの人と飲みに行き、勢いのままホテルに入って……抱かれたんだ)

ぼんやりしたまま顔だけ動かして視線を移すと、ベッドの端に腰を掛けている北村さんの背中があった。起きたばかりなのか、彼もまだ裸でいる。

北村さんの向こう側にテレビがあるらしく、ここからだ画面が見えない。音だけ聞いていると、

昔のドラマの再放送みたいだ。こういう番組がやっている時間ということは、もう朝の十時は過ぎているはず。

—— 思わせぶりなことばかりしないで！ 私のことなんて、好きでもなんでもなくせに。

—— 違うんだ、そうじゃない。君は僕の太陽だ！ だから……僕から離れないでくれ！  
普段なら鼻で笑ってしまおうようなドラマのセリフが、妙に心に響く。

キザでクサイセリフだけど、その人の本気の心が入っていればきつとすごく嬉しい言葉だ。  
二年半付き合っていた彼に、こんな言葉をもたらしたことは一度もなかった。私にそれほど本気ではなかったのだろう。彼が本気になったのは、新しく好きになった女性のほうだ。

自分の何がいけなかったのか。

彼を惹きつけておけなかった私が悪いの？ そうだ、それが答えなんだと、この二か月間、何度も何度も自問自答してきた。

苦しくて苦しくて……出会ったばかりの人と、こんなことまでしている自分が、むな虚しい。

北村さんの背中を見つめていると、婚約破棄されてからいままですと出ることのなかった涙が、目にあふれた。ぼろぼろこぼれて横に流れていく。

同じ気持ちを感じたに違いない北村さんの気持ちを考えると、よけいに泣けてきて止まらなかつた。

(つらかっただろうな。つらくてつらくて、私みたいいきつと、自分を責めているんだろう。だから昨日、私とあんなふう<sup>に</sup>に過ぎたんだ……)

ふいに彼の背中にすがりつきたくなる。でも、そんなことをしても迷惑なだけだ。

私はその衝動を我慢しながら涙を拭ぬおうとして、「ぐすん」と鼻を鳴らしてしまった。

「あ、すみません、起こしちゃいましたか。うるさかったですよね」

振り向いた北村さんが申し訳なさそうな顔をする。涙を見られてしまったかもしれない。

「い、いえ、全然大丈夫、で……す」

咄とつ嗟に顔をそらそうとすると、こちらへ伸びた彼の手に、頭をぼんぼんとされた。

「っ……………」

彼の行動に動揺する。ベッドでめそめそ泣いている女なんて鬱陶うつとぎしいだろうと思ったのに。

「なんでフツたりしたんでしょうね。こんなにカワイイのに」

思わぬ言葉を受けて、動揺が増した。どうしていいかわからなくなった私は、シートにくるまっ  
たまま、じつと固まる。

北村さんの手が私の髪を撫なでた。その感触があたたかくて、また涙があふれてくる。

心のなかに溜ためまっていたものが、どんどん流れ出して、綺麗に洗われていく気がする。彼は何も  
言わずに私の髪を撫なで続け、こぼれる涙を拭ぬってくれた。

優しい時間だった。

テレビから聞こえる音はドラマから天気予報に変わっている。今日もいいお天気らしい。

「眠れました？」

私の涙が止まった頃、北村さんはふと気づいたように言葉を口にした。

「眠れました。あなたは？」

「俺も眠れました。久しぶりに、ぐっすり」

改めて、明るいなかで顔を見合わせた。

北村さんの髪がはねている。起きたばかりで、まだ寝ぼけているみたいな表情をしていた。こういう無防備な男の人の顔を久しぶりに見た。

「俺……目が覚めて、思ったんです。いろいろわかってなかったんだなって」

彼は再び背を向け、ぽつぽつと話し始める。

「婚約破棄されてからずっと、心のなかで自分を責めてました。浮気された自分が悪い。彼女の気持ちに気づかなかった自分がいけない。そんなふうを考えて、彼女を問い詰めることすらせずに、無理やりこの現状を受け入れてました。すがったりするのはカッコ悪いし、どうせ自分がいけないなら、もういいやって」

胸の奥がひりひり痛んだ。あまりにも私と同じ思いをしているこの人に、親近感や同情、共感以上の何かを感じているのに、それがなんなのかを、うまく表現することができない。

「でも今朝目が覚めて、もしかして俺だけが悪いんじゃないかと、お互い様だったんじゃないかと、そう思えたんです」

「お互い様？」

「俺も彼女も、自分のことしか見えてなかった。相手の気持ちをよく知ろうとしなかった。俺が気づいてやらなかったように、向こうも、こうなった時の俺の気持ちは何も考えていなかったんだろ

うって」

苦笑した北村さんは、顔だけこちらを振り向いた。

「なんかふと、そう思ったんです。いや、思えたっていうのかな。いままではそんなこと考えつきもしなかつたんですが、あなたと寝て、あなたの寝顔を見ていたら、なんかそう、思えた」

微笑んだ彼の瞳に、私の心臓がきゅっと掴まれる。

切なくて、痛い。痛いけれど、昨日とは違う。ただつらいだけの痛みではなく、真つ暗闇くらやみの中の小さな灯りのような光が湿じる、ホッとする痛みだ。

「仕事が忙しくて彼女に寂しい思いをさせていた俺が悪いのは、そうなんですけど、それで離れていったなら仕方がない。彼女はそういう俺を理解できなかつたし、それが悪いことではないとも感じてきたんです。……って、何言ってるのか、よくわからないですよね」

「ううん。なんとなくわかります。私も北村さんと同じように、自分の何が悪かつたんだろう、私だけが悪かつたんだって、そう考えていました。この二か月間ずっと……ずっと同じところをぐるぐる回っていたんです」

家族にも友人にも言えなかつた言葉が、するすると唇からこぼれていく。

「だからいまの北村さんの言葉で、私も軽くなった気がします。お互い様って思ってもいいのになって」

彼が今度は体ごとこちらを向き、私を見つめた。

「……俺」

「はい」

「あなたのこと、ちゃんと慰められましたか？ 昨夜は俺ばかり、その、気持ちよくなっていたというか。自分本位だったでしょう？」

「全然そんなことないです」

「本当に？」

「十分慰めてもらいました。私もすごく、その……よかったです。私のほうこそ、あなたを慰めてあげられましたか？」

「ええ。俺も十分慰められました」

クスツと笑い合う。私の心にあつた硬いしこりが昇華されていくようだ。

慰め合ったのが、この人でよかった。彼もそう思ってくれたなら嬉しい。

「出ましようか」

「ええ」

私たちは順番にシャワーを浴び、支度を整えてホテルの部屋を出た。

空は天気予報通りの五月晴れだ。日は既に高く昇って、辺りは初夏の眩しさに満ちている。

私たちは駅のそばで立ち止まった。北村さんが私に向き合い、ぺこりと頭を下げる。

「ありがとうございます」

「こちらこそ……ありがとうございます」

新宿駅は多くの人が行き交い、今日も賑やかだ。ここはいつでも変わらない。私たちがどんな関係かを気にする人なんて、誰ひとりいない。

私はすつきりした気持ちで彼を見上げた。きつともう、北村さんに会うことはないのだろう。

彼がここから何線の電車に乗るか知らないし、もちろんどこに住んでいるのかもわからない。何をしている人なのか、どんな人が彼の婚約者だったのか、も。

「お元気で、北村さん」

「あなたも。加藤さん」

挨拶をし、私が先に彼に背を向けて数歩進んだ時だった。

「あの……！」

後ろから声をかけられた。振り向く前に、北村さんが私の前に回り込んでくる。

驚いて立ち止まると、彼は切羽詰まったような表情で私の顔を見つめた。

「あなたが——」

そう言ったあと一瞬口をつぐんでから、彼は続ける。

「加藤さんが元気になったかどうか、いつか確認できたらいいなと」

「え？」

「……だからその……加藤さんの連絡先を教えてくださいませんか？ SNSとかのメッセージの送り先だけでいいんで。俺のことも報告したい、ですし」

目を泳がせながら、あれこれ言葉を選んでる彼がかかわいく思えて、笑いが込み上げる。

「ふっ」

「笑うことないじゃないですか。こっちは真剣なのに」

「ごめんなさい。うん、わかりました」

むくれた北村さんに向けてスマホを見せると、彼もスマホをポケットから取り出した。メッセージを送れるSNSを教え合う。

「俺も元気になったら、連絡入れます。いつになるかは、わかりませんけど」

「その頃には私も、胸を張って元気になったと言えるようになっていきたいです」

「その時は俺、あなたの本当の笑顔を見てみたい、です」

微笑んだ北村さんの表情に胸がきゅんとした。少しだけ、別れがなくなっている自分に気づく。

「じゃあ、お元気で」

「あなたも」

今度は私が、雑踏に紛れていく彼の背中を見送る。

北村さんと過ごして、心がうんと軽くなった自分に気づいた。肩に背負った重たい荷物をようやく下ろせたみたいで、そんな気分だ。

やっと涙を流せるようになったのは、私と同じ目に遭い、同じ気持ちを持っていた彼を知って、心が緩んだからだろう。そして、彼が思いのほか、とても優しくかったから……

いつかまた、それこそ何年後かに彼と会うことがあったら、心からの笑顔でもう一度お礼を言おう。

私はあなたに救われました、と。

心に生まれた大切な思いを、私はそっと胸にしまった。



まだ梅雨が明け切らない七月初旬。道端に並ぶ木々の、雨粒が滴る濡葉色が美しい。

そんなしとしと降り続ける雨のなか、俺は海猫ハウジングのビルに向かって歩いていく。

「北村様、こちらへどうぞ」

案内された会議室には人事部長と、今回の企画にかかわる社員がふたり待っている。俺は机の前に座り、差し出された資料に目を通す。

「応募総数は千二百七十二件。そのなかから私どもで選んだ十人の方の資料です」

「ありがとうございます」

俺が代表を務める建築事務所ノースヴィレッジアーキテクトと、大手不動産会社である海猫ハウジングが打ち出した、新しいコラボレーション企画。それが古民家をリノベーションしたシェアハウスだ。今日はその企画のために集まった。

ノースヴィレッジアーキテクトは主にリノベーションを請け負っている建築事務所で、代表である俺と、俺と年齢の近い社員が三人だけの、新進気鋭の若手建築士の集まりだ。

今回は、海猫ハウジングが提案する「古民家再生プロジェクト」事業のための試みに、うちが古



民家のリノベーションを引き受けた。そこはシェアハウスになるのだが、本格的に貸し出しを始める前にモニターを募集し、住み心地を検証してもらうのだ。

渡されたモニター候補についてまとめた資料を見ていた俺は、思わず声を上げてしまった。

「えっ!？」

「どうされました？」

「いや、いえ、なんでもありません」

用意されたペットボトルの水を飲んで、気持ちを落ち着ける。もう一度資料に目をやった。そこに書かれていた人物。

——加藤星乃。二十八歳。女性。

これは、新宿で出会い、俺とひと晩過ごした加藤さん、ではないか？

スマホで交換した彼女のメッセージの登録名は「ほしの」だった。年齢も彼女と同じだ。

応募の日付は四月の頭。俺と出会ったのは五月中旬だから、その一か月以上前か。

とりあえず彼女の志望動機を読む。

——結婚式の準備が終わる直前に婚約破棄をされ、職も失い、何もかもどうでもよくなって、どこまで運がないか試してみようと、ダメもとで応募してみました。

「ふは……っ！ あ、たびたびすみません」

間違いない、加藤さんだ。婚約破棄されて自棄になり、シェアハウスに申し込んできたのか。

「ああ、その方の志望動機ですか。正直でいいですよね」

俺の手もとを見た女性社員がにこやかに笑う。

「ええまあ、ほんとに、正直ですよね、はは」

正直すぎるだろ……と突っ込みたくなるのをなんとかこらえ、加藤さん以外の全ての資料にも目を通す。

「この十人の方との面談のあと、三人にしぼる予定ですが、最終的な判断は北村社長にお願いします」

人事部長に頼まれる。

「よろしいんですか？」

「ええ。シェアハウスに住む二十代から三十代の男女と歳が近い北村社長に選んでもらったほうがよいとの、うちの深草の判断です」

深草というのは海猫ハウジングの社長だ。

そして、四人で面談のスケジュールや進行を確認していった。

「これでよろしければ、当選者にはこちらから連絡のメールを入れますので」

「ありがとうございます。私のほうに何も不都合はありませんので、この方たちでお願いします」

「わかりました。では後日改めまして、面談についてのご連絡を差し上げます」

「よろしくお願いします」

「ご足労おかけしました」

打ち合わせが終わり、海猫ハウジングを出る。

その時になっても、加藤さんらしき人の書類が頭から離れなかった。

縁があるのだろうか。「加藤さん」と。

(本人に確かめてみたいが、違ったら個人情報流出になる。ここは様子を見よう。……まず加藤さんに間違いはないと思うが)

婚約指輪を売りに行った日から一か月半が経つ。あの日出会った、自分と同じ立場の女性。あんな都会の真んなかで出会うのは宝くじに当たるようなものだ。

偶然が重なって一緒に居酒屋で飲み、意気投合した。ホテルに誘ったのは俺だ。

無理して笑っている彼女を、このまま帰したくない。もっとそばにいたい。そして――

あの朝、彼女の寝顔を見つめていたら、自分のなかにある暗いものが全て昇華しずかされていく気がした。忙しすぎて元カノにかまってやれなかった負い目も、簡単に婚約破棄された自分の価値のなさも、全部。

加藤さんと別れがなくなった俺は、またすぐにでも会いたくて無理やり連絡先を交換したのだ。

(でも彼女は俺に再び会いたいとは思わなかったかもしれない。……連絡先を聞いた時、冗談だと思っただのか、笑ってたもんな)

だから連絡はしていない。いまもしないと決めた。面談当日まで知らんフリしていよう。

それから二週間後の今日、シェアハウスのモニターを決める面談が行われる。

当選者全員から、面談に出席する旨むねの返信メールがきているそうだ。ということは、当然加藤さ

んもそのなかにいるわけで……

いや、本人に確認を取っていないので確実に加藤さんだとは言えない。だが可能性は高いのだ。

いよいよ今日、彼女に再会できるかもしれない。

俺は気持ちが高揚高揚して、居ても立つてもいられなかった。

「……なんなんだよ、俺は」

「どうした?」

ニヤける俺を、社員の内村うちむらが不審な顔で見る。ひとつ歳上としうえの彼は優秀な建築士だ。いずれこの会社は彼に任せるつもりでいる。

「いや、なんでも……。じゃあ行ってくる」

「海猫ハウジングだね、行ってらっしゃい」

内村に見送られて事務所を出た。

梅雨つゆは明けている。照りつける日差しを浴びながら、俺は黒いジャケットを手にアスファルトの上を歩いた。さあ夏本番だと言わんばかりの蝉せみの声が、うるさいくらいに降ってくる。

海猫ハウジングに到着すると、先日と同じメンバーに迎えられて面談室に入った。人事部長とこの企画たくわに携たづなわるふたりの社員だ。

「本日はよろしくお願ねがいいたします」

「こちらこそよろしくお願ねがいいたします」

応募者の詳しい個人情報を書かれた資料を渡された。海猫ハウジングが応募者とメールでやり取

りしたもので、先日見た情報に追加されている。

パラパラとめくって確認していく。二十代が六人、三十代が四人。男女半々だ。職種や趣味嗜好、現住所と電話番号なども書かれていた。

「加藤」さんの趣味は料理。苦手な食べ物はウニか……、珍しいな」

仕事だというのに加藤さんのことばかり気になって仕方がない。

「最初の面談の方がいらしています。どうされますか？」

しばらくすると、ドアから入ってきた社員が人事部長に尋ねる。部長は頷き、俺を見た。

「では始めましょうか。北村さん、よろしいですか？」

「ええ、始めましょう」

メガネをかけ直し、姿勢を正す。

ひとりひとり、たっぷり時間をかけて面談をしていった。

そしていよいよ、ラストが加藤さんだ。

「加藤星乃さん、どうぞ」

部長が名を呼び、ドアがトントンと叩かれる。

「失礼します」

彼女の声だ。間違いない。

周りに聞こえそうなくらいに、ドクンドクンと鼓動が鳴り響いている。彼女がどういう反応をするのか楽しみで、怖い。いやそれよりも、俺に気づかないどころか、忘れられていたら――

室内に入ってきた加藤さんはお辞儀をして、顔を上げた。

「あ……!?!」

「どうされました？」

驚く加藤さんに部長が怪訝な顔をする。

「い、いえっ、なんでもないです。すみません」

「どうぞ、そちらにお掛けください」

「……失礼、します」

彼女は勧められた椅子に座った。あそこまで動揺しているということは、俺だとわかったのか。忘れられていなかったことにひとまず安心しつつ、冷静なフリをして資料に目を落とした。

（偶然にもほどがあると思っているかな？俺もそう思ってるよ、加藤さん。聞きたいことはあるだろうが、いまはまずシェアハウスの面談にお互い集中しよう）

彼女の視線が俺に向いているのがわかった。その視線がくすぐったい。

「海猫ハウジングの人事担当の鳥羽と申します。こちらが建築設計事務所ノースヴィレッジアーキテクトの北村代表取締役。そして、弊社の古民家再生プロジェクト担当の小菅と井ノ原です。どうぞよろしく願います」

ふむふむと話を聞いていた加藤さんは、俺の名前が出た時だけ、目を見ひらいた。「北村」だと確信したのだ。わかりやすい彼女の表情を見た俺は、思わず笑いそうになるのをこらえる。

「どうぞ、そちらの資料をご覧ください」